
アーネンエルベの憂鬱

犬柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アーネンエルベの憂鬱

【Nコード】

N8220K

【作者名】

犬柳

【あらすじ】

いま紡がれる違うアーネンエルベでのお話

part 0 3ヒロインによるプロローグ（前書き）

アーネンエルベのお話。

それを今回、型月キャラ個人のストーリーや心情をメインにしてみました。

お暇なればひお立ち寄りくださいな。

part 0 3ヒロインによるプロローグ

セイバー 「ついにこの日を迎えましたね。」
<以下剣>

アルクエイド 「うん、ついにというか、やっとという感じ？
<以下アルク> 作者が構想してから二年でスタートって遅いし
ね。

私待ちくたびれちゃった。」

両義 式 「同感 遅すぎるだろう、 普通。 遅すぎて
辞めようかと思ってた。」
<以下 式>

剣 「(汗)オホン。 と、とにかく!! 普段
のアーネンエルベで叶えられない 読者や
作者の希望ストーリーをここで紹介するのが、ここ“アーネンエル
ベの憂鬱”なのです。」

式 「希望というより、妄想だろう。 あと、ほと
んど作者のストーリーとなると思うぞ。 賭けてもいいが、2週間
で終わるぞ、この企画」

アルク 「うんうん。 作者のダサイ文才じゃあ、そこまでだ
よね~~~~~

あと、アタシ、一週間で終わると思う」

剣 「エヘン、エヘン!! 何か今、聞き捨てならない発

言がありました。が、なかったことに

しましょう。今からこれでは、作者が思いやられますから。

それでは、みなさんアーネンエルベの憂鬱をお楽しみください。」

part? 黒桐 鮮花の場合(前書き)

今回は、鮮花のお話。

アーネンエルベでの志貴とアルクエイドとのデート。

それを見て鮮花はどう思うのか？

ではご覧くださいませ。

part? 黒桐 鮮花の場合

私こと黒桐 鮮花は、兄である、黒桐 幹也を愛している。 いや、
本当に一人の男性として……

だからなんだろうなあ……

何故か！！ 目の前の光景が許せないのは！！！！

ここ、喫茶店アーネンエルベは、店内は薄暗いが、一部では、評判
のお店だ。

評判とは、いろいろある。

喫茶店なのにカレーを食べまくり、店中のカレーを食べつくしたシ
スターさんとか、

メイド喫茶でもないのに、アルバイトととして、メイドがあらわれ
るとか、

ある日、突然、店が巨大なピラミッドに変わったとか、e t c

とにかくいろいろある店だが、目の前の光景ほど腹の煮えくりかえ
るものはない。

そう、それは……

「ねえ、ねえ。志貴、私、これ食べたい。」

「なつ！！ 勘弁してくれ。今の俺の財布の事情が厳しいのは知っているだろう？」

秋葉もうるさいんだから。」

「むーっ！！ 何よ！！ 妹が許さないと、アイス一つ買えないわけ？」

いんぼーよ！！ いんぼー！！ 妹が私と志貴を僻んで、いやがらせをしているんだわ。

血が赤くないのよ。だから、そんなことができるんだわ。そんなんだから、胸がアレなのよ！！」

「ばっ！！ そんなこと言うな。これが、秋葉に聞こえたら……」

「誰の血が赤くないですって。兄さん？」

「あ、秋葉！？」

「ふふ、さっきから、盗聴器で聞かせてもらえば……」

随分といろいろ言いたい放題言ってくれてるようですね。
お二人とも？」

「なっ！！ 違うぞ、秋葉。まずは、落ち着いてくれ！！言っ
たのはアルクエイド一人だけであってだな……（汗）」

「ぶー！！ ぶー！！ 何よ！！ 志貴だってさっき言っ
ていたじゃない。」

「あ、あれは、その、」

「どちらが言ったかなんて関係ありません。 兄さんにはお
しおきです。」

「ぎゃー……」 <志貴>

.....

まるで、我がことのように思える、光景。

急に髪が赤くなり、お兄さんをボロボロにしている女の子
<おそろく、何処かのご令嬢だと思っ>

容姿抜群く私が嫉妬するくらいで、でも頭の悪そうな金髪の外国人女性

式の知り合いらしく、アルクエイドさんと言っらしい。

そして、どこか幹也に似た雰囲気を持つ、しきと呼ばれる。メガネを掛けた学生さん。

で、何が、気に食わないかというと、彼がしきと呼ばれていること。

そして、その人が私がこの店に来るたび、アルクエイドさんとイチャツイていることだ。

正直言つて、その光景は、幹也と式が一緒にいるときに次いで二番目に嫌。

何故というと、まるで、私が置かれている状況にそっくりだから。

最愛の人をどこぞの馬の骨に盗られた雪辱感。

あの人たちを見ているとそれを実感してしまう。 ぶり返してしまふ。

おそらく、あの学生さんの妹も私同様、あの人が好きなんだろう。 愛しているんだろう、一人の女性として……

そう考えると、やっぱり、背徳的な恋は、叶にくいものであり、茨の道と実感する。

あの人金髪の人に魅かれているのは間違いないと思う。

だけどあの女はそれが嫌なんだろう。
でもこれは、事実なんだ。

あの女じゃあ、あの人の大切にはなりえない……

やっぱり、私じゃだめなのかな？ やっぱり、幹也のことはあ
きらめて……って!!!

これじゃあ、私だけが、間抜けじゃない。

うーーーーー!!! 見てなさい式!!!

いつかあんたをギャフンと言わせて、幹也を奪ってやるんだから。

そう思い、これ以上、嫌な思いをしないよう。私は、店を後にし
た。

私は、幹也の大切になる事を心に誓って

part? 黒桐 鮮花の場合(後書き)

こんにちは、犬柳です。

いやあ、今回、ルビの振り方が初めてで、二回も書き直しました。
すみません!!!

では、感想etc受け付けていますので、是非おねがいします。

part?

- 遠坂 凜・間桐 桜・ライダー の場合 -

某月某日 昼 アーネンエルベ店内

この日、私、遠坂 凜は、この店で、一種の修羅場を迎えている。

何故こうなったのか？

それは今でもわからない。でも、一つだけわかることがある。

アイツの教育は徹底的にやろう。もう他の女性にフラグを立てないくらい。

「ふーっ 暑いわねえ。 まだ春だっというのに。 アーネンエルベに寄って行こうかしら。」

「そうですね。 冷たい飲み物でも飲んで休みましょうか。」

「賛成です」

あまり、多くを主張しないライダーさえ、この暑さに参っているらしい。

凜達にとってアーネンエルベは、あまりいい思い出のない店だ。

だが、この暑い日に涼むのなら、地理的及び店の雰囲気からしてアーネンエルベほど

いい喫茶店はない。

普段薄暗い照明が今回は涼むのに最適な

環境なのだ。

だが、この日に入店したことを彼女達は心から後悔することになる。

カラン、カラン

ドアのベルの音が鳴ったその瞬間……………

凜は地獄絵図を見ることになる。

「なっ……………何よ……………これ……………」

凜が口ずさむ。桜とライダーも同意見という顔つきだ。

それは、もう悲惨だった。倒れたテーブル、壊れた皿、落と

された料理、

……………巻き添えを喰ったジョージ店長&黒メガネ学生服etc……………

……………それらが示すものそれは……………

「もーっしつこいな、妹もシエルも、良い？ 志貴と私は恋人同士なんだから、

どこで何しようと思手じゃない！！」

「何が恋人ですか？ あなたが勝手に連れまわしているだけじ

やないですか？

「このアーぱー吸血鬼！！」

「よくもいけしゃあしゃあと！！ 天が認めても当主である私がそんなこと認めません！！」

真祖と代行者と何処かのご令嬢の三つ巴の争いであった。

「またですか。」

ライダーが呆れたようにつぶやく。

アーネンエルベでこの光景はここまでは日常茶飯事なのだ。

彼らの目当ては倒れている学生服。 名を遠野 志貴という。

真祖曰く彼女の恋人だそうだ。 それを聞いた時、凜は驚いたそうだが、

この光景から見て、あの二人にフラグを立てているく恋愛フラグ<フラグが乱立しているほうが、もっと驚いた。

この時、三人の頭のなかで浮かぶ人物は、衛宮 士郎だが、当の本人と彼との相性は最悪で、

何故か会うたび、乱闘になる。

アーチャー曰く理由なんてないんだらうとのこと

しかし、士郎と違いこの優男のどこがいいのか？

特に凜には皆目見当もつかなかった。

だが、今回、この後、この男を見て、桜、凜はある決心をした。
下僕男の子の教育はきっちりしよう！！！！！！

ば

そう言いつつ、三人は家路に戻って行った。

part?

- 遠坂 凛・間桐 桜・ライダー の場合 - (後書き)

何これ……？ やはり頭で思い描くことと書くことは大きな差が……

でもめげずがんばります。

お気に入り登録が初めてできました。 感謝

これからもがんばっていきます。

以上、犬柳でした

part?

柳洞 一成の場合(前書き)

今回は一成。

士郎と志貴の仲の悪さから彼が考えることとは？

part?

柳洞 一成の場合

アーネンエルベ店内

「久しぶりだな。赤毛の不良男」
メガネの青年は、衛宮に向かってにこやかに大量の毒をもって答えた。

衛宮はその言い方が気に食わないらしく、

「だまれよ、貧血のくせに女の人と毎晩出歩いている、エロ学派」
対する衛宮も普段からは考えられない言葉を口にする。

対するメガネの青年も早くも堪忍袋の緒が切れたらしく、

「上等だ!! 今日という今日はその不良頭をきちんとした黒に染め直してやる!!!!!!!!!!!!!!」
ナチュラルカラー

売り言葉に買い言葉、衛宮もまた、

「それは、こちらのセリフだ!!! 今日こそ再起不能にしてやる!!!!!!!!!!」

そして、取っ組み合いになった。

うー！ー！ー！ー！ー！ー！む………わからん！ー！ー！ー！

いったい衛宮はあの青年のどこが気に食わんというのだ？

メガネの青年は遠野志貴と言う名で、

俺も一度話してみたが、礼儀正しい人だった。

それに衛宮とて女のこととて人のこと言える柄ではあるまいに……

………

いや、そもそもだ！！

おれにとつては、衛宮に嫌いな人間がいるというのが驚きだ。

あの慎二でさえ、付き合える衛宮なのだ。

あの青年と仲が悪いとは一体………

仕方ない。天敵に尋ねるのは心苦しいが、衛宮のため、遠坂に聞くしかあるまい！！！！

穂群原学園 放課後

「遠坂、話がある。」

「めずらしいわね。生徒会長、明日は季節はずれの台風かしら？」

「どつという意味だ?! それは？」

「どつという意味って? そのまんまよ、貴方が私にお話なんてよっぽどのことよ。」

「くっ……女狐が……」

そう呟きながらこの天敵と早く別れるため、事情を速やかに話そう。

「実は、衛宮がかくかくしかじかなんだが……」

それを聞くと、あの女狐めは珍しくため息をついた。

「はあ……またやったのね。衛宮君。気にしないで、柳洞君。」

あの二人にはいつものことだから

あれがいつもなのか? ということは衛宮と遠野氏とのけんかは日常茶飯事ということか? いや、そうじゃなくて、

「あの衛宮が嫌うほど、あの遠野という男は嫌なやつか? 俺にはそうは見えんが……?」

「そうじゃないわ。あの二人は、ただ互いが気に食わないだけ。私たちから見ればどつちも

どつちなのね。まあ、衛宮君にしたら、似ていること自体気に食わないかもね。」

そう言って、女狐は去った。

なるほど。

衛宮と遠野氏が似ているか……

それなら、俺があんな女狐が気に喰わないのは、いままでの経験より
むしろ……

はっ!!! いかん!!! 俺は何てことを……

俺とあの女狐と似ているなどとありえん考えが浮かぶとは!!!

おのれ!!! 遠坂!!! 今度こそ、その化けの皮をはがしてやる!!!

part?

柳洞 一成の場合（後書き）

後書き 犬柳です。今回は、一成です。終わり方が鮮花と似ているような……我が駄文ながら、表現が稚拙です。土郎と志貴の仲の悪さ、最悪ですね（笑）でもそれを見ている人たちは何を感じているのか。それを想像して書きました。今回は一成でしたが、今度は別の人物にしてみようとおもいます。では

part? 陸上3人娘の場合(前書き)

一成と同じ日のアーネンエルベ
そこで繰り広げられる別模様

part? 陸上3人娘の場合

「久しぶりだな。赤毛の不良男」

そう言つてメガネの学生は、赤毛少年に微笑みました。

「黙れよ。毎晩女の人と出歩いているエロ学派」

赤毛少年も同じような反応を繰り返しました。

その数秒後アーネンエルベは、子供のけんかの応酬となり、2人仲好く追い出されましたとさ。

それを見ていた穂群原学園陸上部3人組

「だ、大丈夫かな? 二人とも……」

心配そうに見つめるのはマネージャー
三枝由紀香

「何、心配はいるまい。何回かこの光景は見ている。今やあの二人の喧嘩は名物になりつつある。」

そう言つてほほ笑むのは陸上部員 氷室鐘

「ゲツ!! マジか? あの二人何時もあんな風なのか?」

そついうのは陸上部エースにして穂群の黒彪(自称) 時寺楓^{ときでら かえで}である。

「それにしてもさ~~~~」

時寺が不思議そうにつぶやく

「あたしゃ、驚いたね、正直。人畜無害で知られる衛宮が敵意を剥き出しにするなんて、一体あの学生服何者?」

「鐘ちゃんは何か知っているみたいだけど……」

「うぬ。名前は遠野 志貴 18歳 三咲高校在学 大財閥の遠野グループのお坊ちゃまだそうだ。

親の関係上、いろいろ遠野に世話になっていてな あととある情報筋から聞いた。」

おもわず博識ぶりには、皆舌をまいたらしい

「さつすが、市長の娘、顔はひろいね~~~~で、なんで大企業のお坊ちゃんに衛宮が噛みつくんだ?」

遠坂に聞いても、わからないの一点張りなんだよな~~~~
うぬ、何かあるとみた」

時寺はいかにもポーズで言う。

「さあな。 その所の所は不明だ。 ただ、私が思うにあの二人は案内にしているということはわかるな。」

「おそらく衛宮はそこが気に喰わんのだろう。」

「そういうものかね？」

「蒔寺は不思議そうに尋ねる。」

「そういうものだ。 世の中嫌いなやつほど自分に似ているものだ。」

「

そう氷室は流す。」

「そうか……むッ！！ 待てよ、ということとは……」

蒔寺は何か考え込む。

「どうしたの？ 蒔ちゃん？」

三枝がそう言いながら、蒔寺の顔を覗き込んだ。

「いやな、もしかして、家の会長と遠坂がライバルっていうのはひよっとして……」

「あ……！ あははまさかね。」

「さあな。 しかし、当たらずも遠からずではないか？ あの二人は」

思い思いに意見を述べる三人。

夕陽が沈むアーネンエルベ

それは、三人の気持ちを象徴しているようだった。

余談だが

あの出来事以来、二人の喧嘩には、勝敗のレートが持ち込まれ、連日、客が盛況になったという。

part? 陸上3人娘の場合(後書き)

なんじゃ?こりゃ

我ながら、文章力のなさに絶望です。

ちなみに氷室の言っていたとある筋とは某カレースイスターです。

part? 志貴 有珠の場合? プロローグ

月×日 アーネンエルベ

ここ、アーネンエルベで一人の少女と一人の青年のお話。

「暑いわね………」

久遠寺 有珠は一人そう呟きながら、道を歩いていた。

何時も屋敷にいる彼女だが、部屋を出ないというのではない。

季節は夏。今年の異常気象には、彼女でなくとも参るであろう。

ただでさえ、部屋に籠りきりの彼女には耐えがたく、近くの喫茶店
アーネンエルベに入ることにした。

このことは、後にT・S氏の不幸のきっかけであったと氏はつぶやく。

喫茶店の内装は薄暗かった。

すみません。今回はコレで終わりです。

構想は決まっているのですが、展開に迷いがあり・・・
と、とにかく！！ 次回をお楽しみに！！！！

？ 凜、アーチャーの場合

それは、終わった光景・・・・・・・・・・・・・・・・
かつて、衛宮士郎とよばれた自分、対峙するは殺人貴と呼ばれた東
洋人の男・・・・・・・・

これは、何度目か？ こう対峙するのは・・・・・・・・
とにかく嫌いだった。目の前の男が・・・・・・・・
自分と似ていながらも、自分とは反対の立ち位置にいるこの男が・
・・・・・・・・

ただそれだけだ。それ以外の感情はない。

そして・・・・・・・・・・また・・・・・・・・
殺しあう・・・・・・・・・・

某月某日 遠坂邸

「でね、アーチャーって、あんた起きてる？」

遠坂 凜は転寝をしているアーチャーに話していた。

どうやら彼が転寝をしているのに気づいていなかったらしい

「むっ！！ すまない凜 いささか転寝をしてしまった。 何の話
かね？」

「あんたね

(嘆息)

いいわ。士郎の話よ。」

「なんだ、また何か痴話げんかでもやらかしたのかね？ 何度も言
つたが、それは君が解決する問題であって、私が関係するもの・・・
」

「違うわよ！・・・！！ なんて、そういう発想になるのよ！！ あ
んたは！・・・」

凜が間をおかずとなる。

アーチャーから言わせれば、それこそ誤解の元だといいたいが保身
のためにも黙っておくことにした。

「じゃあ、何かね。アーネンエルベのケンカの件か？」

アーチャーの第二波に凜は的を得ているという顔になった。
どうやら、アーチャーにはうすうす察しがついていたようだ。

「前にも言ったが、凜。私にはあいつ衛宮士郎の記憶はない。だからあのメ
ガネの少年が何者なのか、どうしても、嫌いなのかは検討もつかない
のだよ。」

本当のことを言うと、アーチャーの言うことに若干嘘が入っていた。
うすうす、あのメガネの少年の存在。

最近夢に出てくるあの包帯男こそ、彼ではないだろうか？
だが、今の彼にはもうどうでもいい話だ。

何故なら、衛宮 士郎はエミヤ シロウにならない。

ならきつと、あのメガネの少年にも同じことが言えるだろう。

？ 凜、アーチャーの場合（後書き）

ごめんなさい。

有珠編は、マホヨが出たあとに書きます。

理由は察してください。

無謀をやるバカな私めにお許しを。

ではまた次回。

episode? 禁句(前書き)

人の嫌がることは言っ
てはいけません

「それで、こんどは何の悪たくみかしら？　ワカメさん？」

「前々からずっとおいしい奴とは思っていたけれど、言うこと言うてくれわね、間桐くん？」

「本当…… どうしてくれようかしら？」

そう言つて遠野秋葉は、髪を赤くし間桐　慎二に殺気を向けた。

遠坂　凛もまた笑顔の殺意を向ける。

黒桐　鮮花に到つては、火を出している。

この事態に発展する数分前

ここは、アーネンエルベ店内、この状態に至つたのは、数分前のこと、また性懲りもなく間桐　慎二が店内の客にちょっかいを出していた。

もちろん、みんな無視。

あるものはまたかと思ひ呆れ、
あるものは、相変わらずおもしろいワカメねーと言ひ
ましてや……

以前コテンパンに懲らしめたはずなのに<詳しい話は、TYPE -
MOON エースVOL5掲載、

ALL AROUND TYPE MOONフェアリーバスターズ
を<参照ください。>

先程の三人に至っては呆れるほどだった。

それに怒った慎二がとっさにつぶやいた一言それが、店内の空気を

- (マイナス) 99度にしたのだ。

(文字通り)

その一言、それは……………

「いいかげんにしろよ、このベニヤ板三人組!!!!」

この言葉に……………

学生服の青年は恋人の金髪女性を連れ、会計を済まして急いで逃げ、
和服の女性は傍観し、

便利屋は顔が引きつっており、

青髪の店員は、良いぞーと茶化し、

白髪、クロ肌の男は……………

ため息をついていた。

そして、現在、怒り狂う三人におびえながら必死に言葉をつなぐ慎二

「なんだい？ ははっ……………いきなり切れるなんて……………」

じ、自分がない旨（注 誤記ではありません！！作者の身の安全のため表記は変更されています。）ですと認めた証拠だよ。
いったいどうすればそんなに育たないんだろっね、ありえないよ
全く……………はは……………」

この言葉が起爆剤となり、
各々の力を発動させ、

「一回、死になさい！！！！（三人同時に）」

そのあと……………

何が起こったかは誰にもわからないという……………

教訓

人の嫌がることは言っではいけません。

episode? 禁句(後書き)

犬柳です。

久々の更新です。

だれか見ていただけるなら、是非とも感想を
ダメだしてもいいですから。

祝

Fate/EXTRA 発売

遅くなりましたが実にめでたいです。

？ 口は災いの元 (蒼崎橙子 遠野志貴 アルクエイド の場合) (前書き)

口は災いの元です。

些細な一言はとももらないおせっかいになるので気をつけまじょう。

？ 口は災いの元 (蒼崎橙子 遠野志貴 アルクエイド の場合)

「ああ、良いコーヒー。 相変わらず、ここのコーヒーはおいしいわね。」

蒼崎橙子は、この日の仕事を部下に一任し一押し付けてアーネンエルベで悠々とコーヒーを飲んでいた。

閑話休題 ちなみに今、彼女の今回の仕事はかなりの学のお金が動いており、このような場合、まず普通の人物なら部下に仕事を任せない。 ある意味大物である。

たしかに彼女はいろんな意味で大物ではあるが………

しかし、このコーヒープレイクを楽しむ時間が、今回、多少なりとも不愉快な出来事になるうとは夢にも思わなかっただろう。

それは、彼女がさきほどのアーネンエルベのコーヒーにたいする感嘆をもらした後であった。

彼女を含め数名の客しかいない閑散としていた店であるが、二人の客が入ってきた。

1人は学生服に眼鏡のおとなしそうな青年 もう1人は、モデルと見紛う程の金髪女性である。

その組み合わせは客の目を引くのに十分であった。奇妙といえはいろいろな点でツツコミ所満載であるのだが、彼女には、見覚えのある顔であった。

学生服の方は確か、遠野志貴という青年であった。彼女の知り合いにと名前を含めいろいろな共通点があることもあり、彼女の記憶によく残っていた。ちなみに、彼のメガネは、彼女が作成したものであり、妹に取られたものであった。作り手である彼女はすぐにわかり、何故、妹があの時自分のものを盗ったことに察しが着いた、あのときは腹立たしくなり、報復を行ったほどだ。

まあ、その報復は現在も継続中なのだが………

問題なのは金髪女性のほうで、彼女の名前はアルクエイド・ブリュンスタツド

吸血鬼の元である、真祖の姫君であり、関わりたくない部類である。その理由はいろいろあるが、象徴的なのが………

「あつー！ レッドじゃない！！ どうしたの？こんな所で」

その言葉にびつくりしたらしく、青年はいさめる風に

「おい、アルクエイド！！」と読んだがあまり効果はないようである。

自身のことをレッドと呼ぶからである。

傷んだ赤色―スカーレット― 魔術師であり、人形師 蒼崎橙子の渾名であり、彼女自身が嫌う呼称である。

その呼称で幾人の命が失われたかはさておき、大抵の場合、読んだ時点で彼女はその人物をぶち殺すと決めている。

では、なぜ、アルクエイドが生きているかというと簡単な話、話にならないからである。

橙子には、元々、戦闘能力はなく、そのため、強力な力を持つ彼女に敵わない。

それゆえ、黙認せざるをえないのだが、やはり不愉快らしく、メガネを取り、両名を見た。

「その呼称はよしてくれないかな、真祖の姫君 それと、遠野、君にも忠告しておくが、私は気は長いほうじゃない。夜中に襲われたくなければ、注意をするように」

口で笑っているものの、目は笑っていなかったりする。

さすがに、恐れをなした志貴だが、アルクエイドの方はお構いなくのんきに高説を垂れていた。

「だめよね ブルーと同じく短気じゃ 最近聞いた言葉じゃ短気は損気って言うのよ。」

「そんなんだから、二人とも未だに独身なのよ」

さすがにこの言葉は橙子のコメカミに来たらしく、平静を装いながら返答する。

「前半の方もいただけないが、後半はさらにいただけない台詞だな、私は妹とは違い、根無し草ではないし、まして、男に困っていないぞ?」

「でも、そんな話聞いたことないわよ。大体、両儀に遅れをとっている点で説得力なんてないじゃない」

ブチンと何か切れた音がした後、橙子はふふふと吹きながら、席を立ち、

「いいだろう、せいぜい楽しみにしている!! すぐなくともお前達

より早く独り身から脱出してやるさ」

と呟きながら、蒼崎橙子（年齢不詳 独身）は、店を後にした。
余談だが、彼女の代金は遠野 志貴が支払ったそうである。

？ 口は災いの元 (蒼崎橙子 遠野志貴 アルクエイド の場合) (後書き)

この話の構想は、かなり前に出来ていたのですが如何せんつたない文章力ですので、ひねりだしてこんなです。

本当にごめんなさい。

ちなみに、魔法使いの夜で蒼崎姉妹に関するいろいろ明かされるかと思うと、すごく楽しみです。

外伝 関係ないド作れる話(前書き)

今回は外伝でアーネンエルベと全く関係ないですが、祝プリズマ
ドラマCD化ということで、プリズマをやります。

外伝 関係ないド作れる話

これはIFのお話

ありえないけど、あったかもしれないお話

アーネンエルベ

クラスカードの回収を終えたイリヤス・フィール・フォン・アインツベルンは、喫茶店アーネンエルベでおもわず、まどろみ夢を見ていた。

それは、セイバーとの死闘の時に、アーチャーのカードを夢幻召喚インストールした時の光景である。

アーチャーのカードを夢幻召喚インストールした時、彼女の意識は、冬木大橋近郊ではなく別のところにあった。

「へっ？」

おもわず、声を上げてしまった。

確か自分は、黒い騎士が現れ、その圧倒的な強さにみんなが危ない
と思いアーチャーのカードを取り出して、それから……
それからのことは覚えてはいなかった。
しかし、

今、見えている光景は、異常であった

夕焼けを背景とした赤い荒野、そこには、工場にあるようなネジや
らが動いており、荒野には……
数え切れない程、剣が突き刺さっていた。

そこで、彼女は、思いがけない物を見た。

人だ。無限に乱立している剣の中心にあたかも自身がそれらの一部
であるかのように人が立っている。

「あ、あの」

おもわず声をかける。

男は振り返り、軽い驚きを覚えながら言った。

「君だったか……オレのような役立たずを呼び出した者
がいたので、誰かと思えば、君とは、この世界では初めてだが、こ
こまで来ると、因縁めいたものを感じるな。」

男は、そう呟いた。

どうして、あの人は、自分を知っているのだろうか？

この世界とは、どういうことなのか？

イリヤには、わからなかった。

ただ、

彼女にわかったことは、彼女の良く知る誰かに似ていたのだ。と
てもよく

「まあいい、今に至ってはこういうこともない。後ろ髪惹かれる思
いもあるが、仕方がない。君は私の力が必要でここに来た。そう
だろう？」

男の問いかけに、彼女は、すぐにうなずいた。

考えとかはなかったけど、みんながピンチだから、そんな暇はない
のだ。

「そうか……なら」

男は再び背を向け、自分に問いを発した。

「ついて来れるか？」

彼女は迷いなく、力強くうなづいた。
その言葉・その背中が、ひどく不器用では、あった。
だけど、
それ以上に頼もしく思えたから。

この話はそれまでである。
イリヤはこの後夢から覚めるが、おそらく、あの光景だけは忘れな
いだろう。

外伝 関係ないド作れる話（後書き）

犬柳です。

プリズマ イリヤ×アーチャーものです。

会話は少ないですが、それはこの二人にはあまり必要ないと思えたからです。

イリヤとアーチャーは会話こそ、少ないですが、実は、お互いによくわかっていいるからこそ会話が成り立たないのでは？ともおもえるものです。

part?

シスターの憂鬱

part 1 (前書き)

今回はカレン

カレン・オンテルシアは、教会の日ごろの激務の合間を縫って、喫茶店であるここアーネンエルベでコーヒー<もちろん、濃度は通常の三十倍、これを試飲した、店員H嬢はすぐ卒倒したとか>を嗜んでいた。非公式であるとはいえ、教会の管理を任されているはずの彼女が喫茶店に来るなど不謹慎このうえないことだが、そこは自分の敬謙奴隷な者に任せてきたので問題ない、いやむしろ、彼らが居てはいろいろと不都合なのだ。

「まさか、このようなものが来るとは……」
因果な者ですね。いかにこの身がそれ向きとは言ってもここまでいくものですか……」

彼女の呟きは彼女の人間性を知りうる者にとって意外なものであっただろう。

しかし、その原因は納得いかないとは言い難いものであった。

その知らせが届いたのは数日前、冬木の教会の管理の指示とは別の部門からの手紙だった。

その部門とは縁がないわけではない、むしろ深いと言った方が正解なのかもしれない。

なぜなら、彼女は教会でも有数の悪魔憑きである。カレンの持つ霊媒体質は悪魔払いには非常に有効である。そのため、エクソシストやエクスキューター達らのいる部門とは縁が深いのだが、カレン自身その部門とは積極的に関わりたいとは言い難かった。

内容は言うなれば、否応なしの彼女のスカウトである。

送り主の名はナルバレック

つまり、教会有数の戦闘集団 埋葬機関のトップである。

埋葬機関は一般的に7名で構成される。予備に8人目が用意されるが、任務に耐えきれず、すぐに使い物にならなくなると言う。

構成員になる条件として、完全実力主義。つまり、力さえあれば、魔術師であろうが、死徒であろうがかまわないという教会ではあり得ないものである。カレンの悩みはこれである。

身分としては非公式ながら、カレン自身の信仰は強い。

それゆえ、異端の集合体である埋葬機関の加入は口こそ出さずとも不愉快なものであった。

「困りましたね……」

シスターは何度も呟くのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8220k/>

アーネンエルベの憂鬱

2010年11月10日18時11分発行